

「そんなら、おまえは、私を知っているのですか。」と、おばあさんはたずねました。「私は、この家の前をこれまでたびたび通って、おばあさんが、窓の下で針しごとなさっているのを見て知っています。」と、少女は答えました。

「まあ、それはいい子だ。どれ、そのけがをした指を、私に見せなさい。なにか薬くすりをつけてあげよう。」と、おばあさんはいいました。そして、少女をランプの近くまでつれてきました。少女はかわいらしい指を出して見せました。すると、まっ白な指から赤い血が流れていました。

「あ、かわいそうに、石ですりむいて切ったのだろう。」と、おばあさんは、口のうちでいいましたが、目がかすんで、どこから血が出るのかよくわかりませんでした。

「さっきのめがねはどこへいった。」と、おばあさんは、たなの上をさがしました。めがねは、目ざまし時計のそばにあったので、さっそく、それをかけて、よく少女のきず口を、見てやろうと思いました。

おばあさんは、めがねをかけて、この美しい、たびたび自分の家の前を通ったという娘の顔を、よく見ようとしました。すると、おばあさんはたまげてしまいました。それは、娘ではなく、きれいな一つのこちようでありました。おばあさんは、こんなおだやかな月夜の晩には、よくこちようが人間にばけて、夜おそくまで起きている家を、たずねることがあるものだという話を思い出しました。そのこちようは足をいためていたのです。

「いい子だから、こちらへおいで。」と、おばあさんはやさしくいいました。そして、おばあさんはさきに立って、戸口から出てうらの花園はなぞのの方へとまわりました。少女はだまって、

おばあさんのあとについて行きました。

花園には、いろいろの花が、いまをさかりと咲いていました。ひるまは、そこに、ちようや、みつばちが集まっていて、にぎやかでありましたけれど、いまは、葉かげでたのしいゆめをみながらやすんでいるとみえて、まったくさかでした。ただ水のように月の青白い光が流れていました。あちらのかきねには、白い野ばらの花が、こんもりとかたまって、雪のように咲いています。

「娘はどこへ行った？」と、おばあさんは、ふいに、立ちどまってふりむきました。あとからついてきた少女は、いつのまにか、どこへすがたを消したのか、足音もなく見えなくなっていました。

「みんなおやすみ、どれ私もねよう。」と、おばあさんはいって、家の中へは行って行きました。

ほんとうに、いい月夜でした。

〈課題②〉 走れメロス

太宰治

ふと耳に、潺々、水の流れる音が聞えた。そつと頭をもたげ、息を吞んで耳をすました。

すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上って、見ると、岩の裂目から滾々

と、何か小さく囁きながら清水が湧き出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメ

ロスは身をかがめた。水を両手で掬って、一くち飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚

めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労恢復と共に、わずかながら希望が生れ

た。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は、信じられている。私の命なぞは、問題ではない。死んでお詫び、などと気のいい事は言つて居られぬ。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！メロス。

私は信頼されている。私は信頼されている。先刻の、あの悪魔の囁きは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまえの恥ではない。やはり、おまえは真の勇者だ。再び立つて走れるようになったではないか。ありがたい！私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ。ああ、陽が沈む。ずんずん沈む。待つてくれ、ゼウスよ。私は生れた時から正直な男であった。正直な男のままにして死なせて下さい。

路行く人を押しつけ、跳ねとばし、メロスは黒い風のように走った。野原で酒宴の、その宴席のまっただ中を駈け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴とばし、小川を飛び越え、

少しずつ沈んでゆく太陽の、十倍も早く走った。一団の旅人と颯とすれちがった瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。「いまごろは、あの男も、磔にかかっているよ。」ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走っているのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。おかれてはならぬ。愛と誠の力を、いまこそ知らせてやるがよい。風態なんかは、どうでもいい。メロスは、いまは、ほとんど全裸体であった。呼吸も出来ず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はるか向うに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。塔楼は、夕陽を受けてきらきら光っている。

〈課題③〉 人類の泉

高村光太郎

世界がわかわかしい緑になつて
青い雨がまた降つて来ます
この雨の音が
むらがり起る生物のいのちのあらわれとなつて
いつも私を堪^{たま}らなくおびやかすのです
そして私のいきり立つ魂は
私を乗り超え私を脱^{のが}れて
づんづんと私を作つてゆくのです
いま死んで　いま生れるのです
二時が三時になり
青葉のさきから又も若葉の萌^もえ出すやうに
今日もこの魂の加速度を
自分ながら胸一ぱいに感じてゐました
そして極度の静寂をたもつて
ぢつと坐つてゐました
自然と涙が流れ
抱きしめる様にあなたを思ひつめてゐました
あなたは本当に私の半身です
あなたが一番たしかに私の信を握り
あなたこそ私の肉身の痛烈を奥底から分つのです
私にはあなたがある
あなたがある
私はかなり惨酷に人間の孤独を味つて来たのです
おそろしい自棄^{やけ}の境にまで飛び込んだのをあなたは知つて居ます
私の生^{いもち}を根から見てくれるのは
私を全部に解してくれるのは
ただあなたです
私は自分のゆく道の開路^{ビオニエエ}者です
私の正しさは草木の正しさです
ああ　あなたは其^{それ}を生きた眼で見てくれるのです
もとよりあなたはあなたのいのちを持つてゐます
あなたは海水の流動する力をもつてゐます
あなたが私にある事は
微笑が私にある事です

あなたによつて私の生いもちは複雑になり 豊富になります
そして孤独を知りつつ 孤独を感じないのです

私は今生きてゐる社会で

もう万人の通る通路から数歩自分の道に踏み込みました
もう共に手を取る友達はありません

ただ互に或る部分を了解し合ふ友達があるのみです

私はこの孤独を悲しまなくなりました

此これは自然であり 又必然であるのですから

そしてこの孤独に満足さへしようとするのです

けれども

私にあなたが無いとしたら――

ああ それは想像も出来ません

想像するのも愚かです

私にはあなたがある

あなたがある

そしてあなたの内には大きな愛の世界があります

私は人から離れて孤独になりながら

あなたを通じて再び人類の生きた氣息きそくに接します

ヒウマニテイの中に活躍します

すべてから脱却して

ただあなたに向ふのです

深いとほい人類の泉に肌をひたすのです

あなたは私の為めに生れたのだ

私にはあなたがある

あなたがある あなたがある